

トピックス

アフガニスタン西部地域（ヘラート） 調査報告

— 難民帰還支援道路整備計画 —

白井 一

1. プロジェクト調査の背景

（1） 難民帰還支援道路の確立

平成13年9月11日の民間機による「ニューヨーク世界貿易センタービルテロ爆破事件」後の急展開により、アフガニスタンのタリバン（Taliban）政権が崩壊し、同国の暫定行政機構にカルザイ議長が選出された。「国連の平和維持部隊の派遣」に依る国内の安定が図られて以来、各国政府の支援が急速に具体化している。その中でイラン、パキスタンを中心に350万人以上のアフガン難民と40万人の国内難民の「再定住支援」が日本政府をはじめ関係支援国の最重要課題になっている。

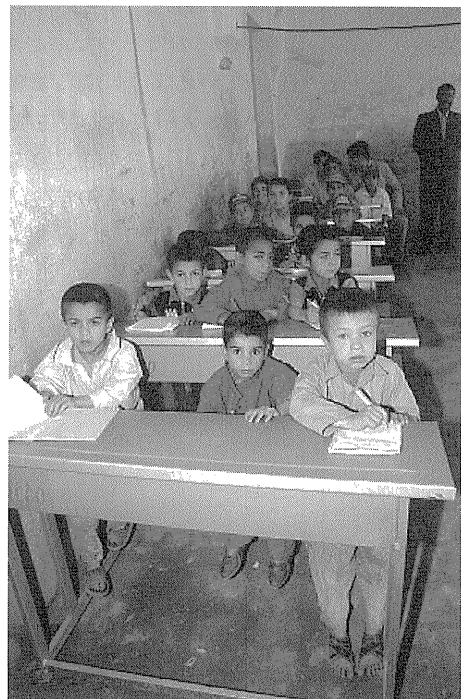
UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）をはじめ、WFC（世界食糧計画）、UNICEF（国連児童基金）等の国連支援機関に混じって、難民や現地人の生活を支援するNGOが既に現地で活躍している。しかし地雷埋設による被災の心配や、長い間の内乱で整備の立ち遅れている道路は一部を除けば実用状態に無く、極めて悪い状態に立ち置かれている。それらの事情から支援物資を難民の生活先に届けることも又難民を帰還させることも出来ない状態で、NGOの支援活動も困難を極めている。

（2） 首都カブール以外は情報不足

カブール（Kabul）市内や中部地域は比較的安全が確保されていると言われているが、イランからの200万人余の難民が帰還するHeratを中心とした西部地域は国連機関や各国政府の目が届かないこともあり、未だ現地事情を正確に知る手段も無い状態にある（写真—1参照）。しかし「電気が来るまでが私たちの活動期間で、電気の来ない僻地の住民支援を活動の基本に挙げております」と言う、日本のNGOの社団法人日本国際民間協力会（NICCO）が当地で既に活躍している。既にヘラート（Herat）市内の小学校（写真—2参照）で教育資機材供



写真—1 カブールからの国内難民の子供たち



写真—2 日本NGOから供された机で学ぶ児童



写真—3 Gulran 郡の中央病院

与やトルクメニスタン（Turkmenistan）国境辺境地域のゴルラン郡（Gulran District）の中央病院の結核棟の運営（写真—3 参照）、さらに奥地の集落で診療所開設を進めている。

（3）危険地域こそ支援が必要

アフガニスタンに対する日本政府が直接手がける経済援助は、当座は「治安に問題がある」との理由から、首都カブールに限られている。

しかし、経済支援を最も必要としているのは、世界の目やアフガニスタンの中央政府は勿論、国際機関や NGO の支援さえ届かない地方都市や辺境地域であり、その必要性は喫緊を要している。それらの理由から日本政府外務省は、アフガニスタンで活動している NGO/NPO に情報収集を始め、適切な案件形成と提案を促す



写真—4 ヘラート市内の光景

目的で本年 3 月 18 日に現地の事情説明会を行った。

当日の説明会の席上、社団法人日本国際民間協力会の小野理事長から「現地の取水と道路の悪さが NGO 活動の大きな妨げになっている」との説明があり、「日本政府に早急に対応してほしい」との要望があった。それらの背景もあり、建設機械の専門家という立場から、社団法人日本国際民間協力会と協力してイラン経由で当地ヘラートに入った。当地ヘラートは、首都カブールから車で 2 日の距離にある当国第三の都市であり（写真—4 参照）、イラン国境に接した西部地域のヘラート州最大の都市である。

建設機械専門家という立場から、道路事情を主体に以下報告したい。

2. 現地概況

（1）ヘラートはカブールより安全

懸案の危険性は全く感ずることなく、UNHCR、WHO、WFP 等の国連機関で働く海外から派遣されている職員も様に「安全上の不安は殆んどなく、むしろ、カブールより安全だ。」との感想を述べている。ソ連が侵攻した 22 年前に破壊した建物が一部残っているが、それ以外は、この長い間の戦争の影響は表面上残っていない。

市内のバザールには商品があふれ、活況のある開発途上国のありふれた一都市の光景である。

（2）断水・停電が頻発

しかし実際の生活レベルは、正に日本の終戦後の様相で水道、電気共に一日の半分以上が断水・停電である。一歩都市を離れると、電気がなく、数世紀前の生活に戻ったような状態になる。もちろん、都市間を繋ぐ電話もなく、海外通話は、衛星電話でしか出来ない。

3. 現地道路建設部門の具体的な要望（当地の計画省傘下の計画局からの要請）

地方道路整備状況を確認後、現場関係者の多くが英語を解さず、通訳も技術者でないことから、当方からの視察報告書と幾つかの提案を英文にして提示した。提案概要は以下の項目である。

- ① Do Gharun/Iran-Herat（アジアハイウエーの一部）の改修工事。特に河川の大型橋梁建設（写真—5 参照）
- ② Herat 市から放射する幹線道路整備。それに伴う道路整備・建設機械の供与
- ③ 上記に関わる人材育成と技術移転
- ④ 農業用水対策と井戸掘り（Gulran 郡訪問の際に知事から強い要望があった）

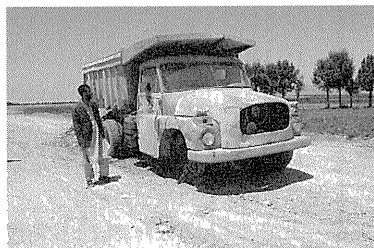


写真—5 橋が無いために川底が路面になっている。

当日は、計画局局长（機械技師）を筆頭に土木・道路関係の責任者と技術者9名が会談に参加して意見交換を行った。その結果下記の要望があった。

- ① Herat市から放射する幹線道路整備、並びに必要な道路整備・建設機械の供給（日本製の優秀な建機が必要の由）
- ② 地雷処理機械（但し本件は地雷処理機関のOMARからの具体的な要望）
- ③ 人材育成（日本での研修を熱望していた。）
- ④ 井戸掘り、水の確保（但し、道路案件とは直接関係ない）

当方からの提案内容と大部分合致しているが、当方が考えていた以上に緊急性のあるのが、道路整備機械であった。現在ソ連、中国製のヨタヨタの建設機械を使用して道路整備を続けているせいもあり、特に性能の確立している日本製の建設機械の供与と人材育成への要望が強かった。会談終了後即、独自で進めているヘラートとカンダハル間の幹線補修工事現場視察を勧められ、数時間掛けて工事現場を確認してきた。作業の一部が写真—6である。



写真—6（上左）中国製のブルドーザ、（上右）ソ連製のエキスカベータ、（下段左）中国製のダンプトラック、（下段右）中国製のモーターグレーダでの道路補修工事

4. 調査した機関・訪問先

調査期間中に訪問した25の機関を表—1に掲げる。

表—1 訪問機関

1. 在イラン日本大使館
2. 在イラン大使館駐在 JICA 専門家（テヘラン）
3. 在イランアフガニスタン大使館（テヘラン）
4. I. R. IRAN Welfare Organization
5. UNHCR in Mashad：国連難民高等弁務官事務所マシアド事務所
6. Herat 市中央病院及び付帯難民キャンプ
7. Herat 市内小学校
8. Herat 市内私立学校/職業訓練学校計画地
9. Primary Health Care (PHC) Department
10. PHC 付属中央病院
11. World Food Program (WFP)：世界食糧計画
12. UNHCR/Herat
13. World Health Organization (WHO) Herat：世界保健機構
14. Gulran District（ゴルラン郡）知事
15. Gulran 中央病院
16. Lahrab/Gulran 診療所
17. Planning Department Herat/Ministry of Planning 傘下
18. Organization for Mine Clearance and Afghan Rehabilitation (OMAR), Herat：アフガン復興地雷処理協会
19. Local Government Road making project
20. Mashhad 市役所
21. Mashhad 市職業訓練センター
22. Mashhad 高等技術学校
23. ELEFANI 女子職業訓練学校
24. ETRAT High School（イラン女子高等学校）
25. Bureau for Aliens and Foreign Immigrants Affairs (BAFIA/Teheran)

5. 現地調査結果（主として道路事情）

（1）アフガニスタン全図と主要道路網と都市

今回の調査の起点はテヘラン（イラン）である。以

下にイラン経由でのヘラート（アフガニスタン）入国経路、現地での道路状況、主要都市と軍閥活動拠点を示す。

(a) イラン経由でのヘラート/アフガニスタン入国経路（今回の調査結果）

- ・東京（成田）⇒ Teheran（空路） 11.0時間
- ・Teheran ⇒ Mashhad（空路） 1.5時間
- ・Mashhad ⇒ Do Gharun/国境（車） 3.0時間
(240 km)
- ・Do Gharun ⇒ Herat（車） 4.0時間
(155 km)
- ・Do Gharun での出入国手続き 1.0時間
車での移動：合計 8時間（合計：395 km）

(b) 現地での道路状況確認：道路補修現場確認

- ・Herat⇔Larab 8.5時間（197 km/片道）
- ・Herat⇔Kandahar に至る国道
片道約 50 km（視察時間 4 時間）

- ・地雷処理訓練所/地雷処理機（Omar International）

(c) 上記記入の主要都市と軍閥活動拠点の関係（1996 年頃）

- ・Kabul：
カブール政権 ラバニ、マスード派（タジク人勢力）
- ・Kabul：
ヘクマティアル派（パシュトゥン人勢力）⇒弱体化

（反タリバン北部同盟（協力関係））	
Mazar-i-Sharif：	ドスタム派（北部ウズベク人勢力）
Barmian：	ハザラ人勢力
Herat：	イスマイル・ハーン派（シーア派）

- ・Kandahar：タリバン（パシュトゥン人勢力）

(2) 物資運搬状況

(a) 車輛通行量

イランからヘラートに入る車輛通行量を、朝 7 時から 8 時まで 1 時間実測した。結果は下記の表のとおりであった。

表一 車輛通行量調査表 (台/時間)

車種	大型トラック (内トレーラ数)	小型	計
台数	78 (7)	6	84

ヘラートに入る車輛とは逆に、ヘラートからイラン、中央アジアに向かうトラックが 1 日当たり 300 台、ジャララバードやカブールを通過して、北方に向かうトラックが 1 日当たり 200 台という数字が関係資料（「タリバン」講談社）にある。それと比較しても 3-4 倍の台数になり、相当多くの物資運搬トラックが復興のヘラートに向かってイランから入って来ているのが分かる（写真一 7 参照）。

貨物を満載したトラックは、イラン国境のドガルーン



写真一 7 物資運搬トラック



写真一 8 トルクメニスタンからの中古車両運搬トラック

からヘラートまでの約 160 km の悪路を一日がかりで入って来る。中古の中小型トラックが大型トラックに満載されて運ばれているのが目に付く。中古車はイランからだけでなく、トルクメニスタンからも大量に入って来ているのを確認した（写真一 8 参照）。道路は、日本と逆の対面右側通行だが、日本の看板をつけた右ハンドル車が半数を占めている。

(3) 道路事情

(a) イラン国境からヘラート

途中 10 年近く前にイラン政府が作った 8 km, 10 km



写真一 9 イラン政府支援の道路整備

の2ヶ所の舗装部分を除いた140 kmは悪路そのもので、トラックの轍が泥濘にはまり、立ち往生しているのが散見される。現在、イラン政府が砂利舗装道路を現在の道路に平行して、一部は新規に造り、一部は旧道の修復を図っている(写真-9参照)。

(b) ヘラートからカブール

一部分を通行した関係者の話では、砂利舗装2車線ではおはぎや強盗の心配があったが、今は、タクシーでもカブールまで行くという状態の由。

(c) ヘラートからカンダハル

ソ連が造った砂利道のハイウェイがあり、今回560 kmの内の40 km程視察した。白い砂埃の舞い上がるガタガタの砂利道のハイウェイだが、懸命な補修作業を確認した。

(d) ヘラートからトルクメニスタン

ソ連が10年以上前に作ったコンクリート舗装が続いている。しかし、破壊がひどく、オーバーレイ等の補修なしでは、幹線道路と言えない(写真-10参照)。



写真-10 旧ロシア政府が作ったコンクリート舗装道路

(e) 二級国道、三級国道

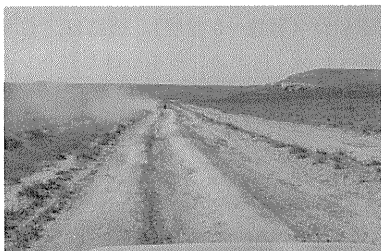


写真-11 Gulran 郡の地方道路

乾燥している時に通行できる状態である(写真-11参照)。

(f) ヘラート市内

幹線以外は、砂利舗装。ほどほどの整備が行われている。

6. アフガニスタン西部地域・州郡のヘラート

イランと同じペルシャ語を話し、同じくシーア派イスラムと同じ宗派でもあるヘラートは貿易の中枢として、4000年以上の歴史を持つ。ジンギス・ハーンの後裔のイスマイル・ハーンがソ連進行を阻むために戦闘を繰り広げた町でもある。結果的には、ソ連軍との戦争で多くの犠牲者を出し、150~200万人とも言われる難民が隣国のイランに脱出し今でも残っている。イランのマシャドで難民帰還支援を続けている UNHCR 事務所は、今回の帰還キャンペーンで既に30万人が帰還したと述べていたが、難民問題の解決は今日でも両国の大きな課題である。

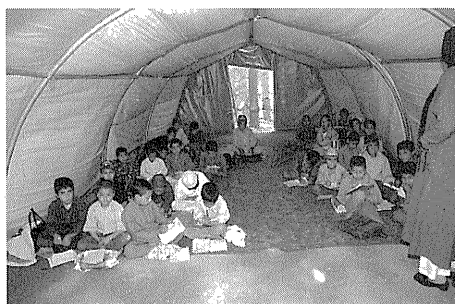
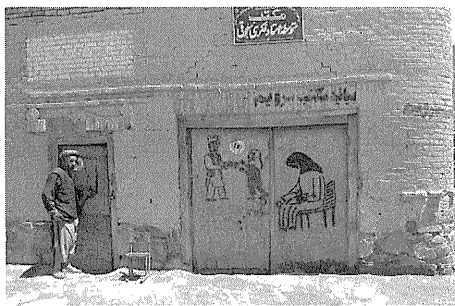
(1) ヘラートの果たす役割

① ヘラートは、イランに隣接する古代貿易路の結び目(ハブ・Hub)と言う役割だけでなく、1995年以降、タリバンが主導権をとっているアフガニスタン経由でパキスタンに至る、トルクメニスタンからガス・パイプラインを埋設する世界的プロジェクトが有る。その実現を図っている米国の石油会社ユノカルを米国政府が支援しているという背景があり、世界的なエネルギー戦略の要にある。

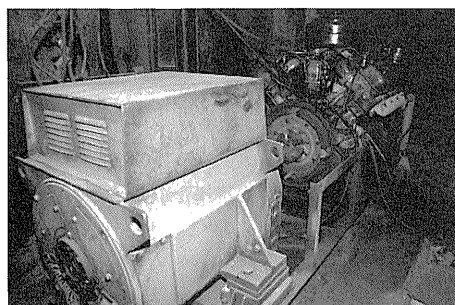
② この大型プロジェクトはカスピ海からトルクメニスタン、アフガニスタン北西部を通り、パキスタンに入り、インド洋に至り、パイプラインで送られた天然ガスを出荷する大型資源開発案件である。アフガニスタンを縦断するパイプラインはヘラート地域を通り、南下する。その意味で将来的には、「カブール以上の重要性を持っている」と当地では言われている。

③ ヘラートを中心とした西部三州は、イスマイル・ハーン派に支配されていた(モンゴル帝国の創建者チンギス・ハーンの後裔と言われており、誇り高い部族)。タリバンとは、敵対関係にあり、反タリバン北部同盟とは協力関係にある。しかし、カブール政権とは若干距離があり、同盟の政治的不安が示す通り暫定行政機構の今後の動きが課題となる。

④ 今日までのアフガニスタン主要武装勢力(軍閥)の拠点関係は、各地方都市を拠点としているので、全国統一が難しい状況にあった。アフガニスタンの西部に位置するアフガニスタン第三の都市ヘラートは、今後のアフガニスタン復興の最重要都市の一つとして注目されて



写真—12 「学校に戻ろう」キャンペーンマークとテント教室の児童



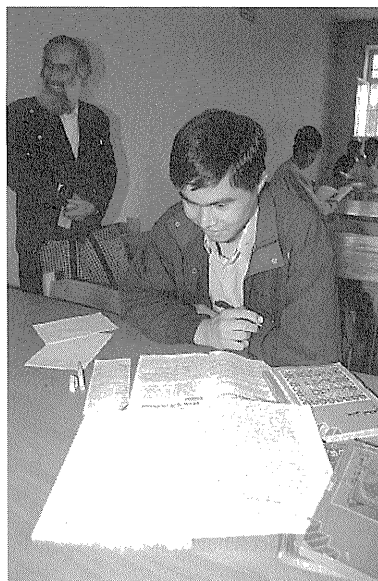
写真—13 停電ばかりの市内の発電機

いる。カブールは、日本政府だけでなく、多くの政府が支援を進めているが、タリバンの本拠地カンダハルとヘラートは、まだ我々の NGO/NPO 以外の機関は、調査に入ることさえしていないのが現状である。NGO/NPO が活動している以上、安全であることは実証済みだ（写真—12、写真—13 参照）。

当ヘラートは、約 10 日間の調査の結果から、「極めて静かな古都で、復興が期待される重要都市」と言える。

7. 終わりに

ヘラートに入るイランの第二の都市マシャドにはイラン最大の大モスクがあり、巡礼の地として多くのモスラムが訪れる。イランに逃れたアフガニスタン難民は、当市の人口の 30% 以上になると言う。22 年前のソ連侵攻の難を逃れてきた難民が第一世代に当たり、今は第二世代の人々も多い。「アフガンに戻り、故国で仕事をした



写真—14 イランの図書館で学ぶアフガニスタン難民の生徒

い」と言う大学入学前のアフガン二世と、当市の市長を囲んで混談する機会があった（写真—14 参照）。「技術を身に付けて帰国しない限り、国へ帰っても仕事がないので、しっかり勉強してから帰国しなさい」と言うのが当座の助言だった。

安全で健康的な環境造りと、国造りを推進する国民育成を図る「人材育成」がここでも求められている。経済活動の根幹であり、流通の要であるインフラストラクチュア整備と道路整備に関わる人材育成が具体的例である。

「道路整備をいの一番に進めたい」と言うのがヘラート州計画局長の要望であった。今日までのアフガニスタンの内乱の大きな要因の一つがトラック輸送による物流網の要所の確保にあったが、今後国が安定してもその重要性に変わりはない。

これらのプロジェクトを進めるために是非、外務省をはじめ、インフラストラクチュア、道路整備に関わる日本の関係省庁である国土交通省の御理解を得て、一日でも早い詳細な現地調査団の派遣をお願いしたい。今回の調査は冒頭で述べた外務省の「All Japan で望みたい」と言う要望を真摯に捉らえて実行した。危険が多いと言われ、水道もほとんど出ない、又停電の多いヘラートに出かけ、情報収集に励んだのは「All Japan」の必要性を感じたからである。これらの報告が、関係者にお役に立てばこれ以上の喜びはない。

【筆者紹介】

白井 一（しらい はじめ）
NPO 法人国際建設機械専門家協議会
（株式会社テラグリーン）